歴史生態学と解釈考古学の節合:オセアニアの環礁景観を事例に

山口　徹

リモート・オセアニアの海洋島世界をあつかう考古学では、自然の営力と人間の営為の歴史的産物として島景観を捉える歴史生態学的研究が早くから進められてきた。特に完新世の海面変動や人為的な地形改変、島外から持ち込まれた生物相への関心が強い。東ポリネシアのマラエといった祭祀遺跡の解釈考古学的研究もかつては盛んだった。本発表では環礁（アトール）の島々の調査事例を用いて、歴史生態学と解釈考古学の節合可能性を議論する。

1. リモート・オセアニアの環礁社会

陸伝いに移動していた人類集団が初めてオセアニア世界に渡海したのはおよそ５万年前、更新世後期の最終氷期のことである。当時は、海面が 120m 低下することによって東南アジア島嶼部がスンダ大陸となり、ニューギニアとオーストラリアも陸続きでサフル大陸を形成していた。しかし、更新世人類の海洋進出は、大型島嶼が多く島嶼間の視認性も高いソロモン諸島までだった。その先は船出した島が波間に消えても、前方に島影１つ見えないリモート・オセアニアであり、この海域に人類が乗り出したのは完新世中期の 3000 年前ごろだった。「出ユーラシア」の歴史のなかではまさに最終章にあたり、それまでの人類が経験したことのない海洋島世界がそこに広がっていた。

太平洋プレートのホットスポットで形成されて以降、どの大陸ともつながったことのない島々であり、固有の生態系は人間の活動によって容易に変化してしまう。なかでも環礁の島々は、人間居住史のなかで作り上げられてきた島々である。オセアニアの南北貿易風帯には、環礁と呼ばれる島々が数多く分布する。環状に連なるサンゴ礁の上に未固結な砂礫の州島が点在するタイプの島嶼で、波浪による堆積作用しかないため海抜 3m をめったに超えず、陸上生態系は貧弱である。それでも、人々が住む環礁州島にはココヤシやパンダナス、パンノキ、バナナなど外から持ち込まれた有用樹が植栽されている。人の手によって植生が多様化してきた島々なのである。特に年間 2000mm 前後の降水量が期待できる環礁では天水田が掘られ、タロイモやミズズイキ類といったサトイモ科根茎類が栽培されている。

2. 天水田の歴史生態学

サトイモ科根茎類は、環礁社会の生計を支える重要な食料源であり、その耕地である天水田と周囲に積み上げられた廃土堤が起伏をおりなす。環礁に暮らす人々は、自然の営力と祖先の営為の絡み合いが生み出したこの景観のなかで暮らしている。その歴史を解明するために、これまで５つの島嶼グループの 10 環礁を調査してきた。なかでも、東ミクロネシアのマーシャル諸島マジュロ環礁と、ポリネシア中央の北部クック諸島プカプカ環礁では、それぞれ複数地点の廃土堤でトレンチ発掘をおこない、良好な層位を確認することができた。

マジュロ環礁には、2.1 ㎢の大型州島に大小さまざまな 195 基の天水田が分布する。堆積学の研究者と発掘トレンチを共有することで、州島中央部の形成が約 2300 年前にさかのぼり、およそ 1000 年前には現在とほぼ同じ規模になったことが分かった。初期居住は約 2000 年前に始まり、州島陸地の拡大にあわせて天水田の分布範囲も広がったことも明らかにできた。プカプカ環礁では 1.3 ㎢の州島に小・中規模の天水田 11 基が掘られ、さらに州島中央の低湿地が部分的に大型天水田に転用されている。廃土堤のトレンチ発掘によって初期居住と天水田の掘削が約 600 年前に始まり、いくつかの天水田は 300 年前に再掘削されたことが分かった。AD17 世紀はちょうどエルニーニョ現象が強まった時期で、熱帯サイクロン被害からの復興過程で天水田が再掘削された可能性がある。

3. 祭祀遺跡マラエの解釈考古学

マラエは、東ポリネシア中央の島々に残る祭祀遺跡の総称で、多くは基壇と方形の前庭部から構成され、石柱が配される。北部クック諸島トンガレヴァ環礁には、細長い州島に少なくとも 21 基の方形マラエが点在する。現地調査によって、そのうち 18 基では主体部の基壇もしくは配石遺構が外洋側に設けられており、先史期の祭祀が外洋を指向していたことが想定できる。前庭部で試掘を実施したマラエ（TON-21）から、外洋を回遊するウミガメの腹甲が炭化物片とともに出土したことも示唆的である。後方にはサンゴ礫を積み上げたマウンド状の地床炉があったから、ウミガメの儀礼的な調理をともなう祭祀が行われていたと考えられる。

ポリネシアの多くの民族誌はマナ(mana)とタオンガ(ta’onga)の概念に言及する。マナとは、世界を運行させる原動力ともいうべき超自然的力であり、作物の成長、家畜の繁栄、豊かな収穫、社会の繁栄をもたらすもので、生物・無生物にかかわらず森羅万象に宿る。ただし、マナの強さは一様ではなく、個々の宿主のタオンガ、すなわちうつわによって異なる。例えば神々や高位の首長のように、強いマナを持つものは優れた存在となるが、タオンガを超えたマナはその存在にとっては危険な力となる。ポリネシアの神話世界のなかで、ウミガメは主要神の 1 柱タンガロア(Tangaroa)と結びつく強いマナをもった動物であり、タオンガの小さい人間がその肉を食べるためには、そのマナを弱化する適切な儀礼を経ねばならない。マラエはまさに、そうした祭祀の場だったと解釈できる。

4. ニッチ構築の歴史的産物

サンゴ礁の上に白砂が堆積したばかりの環礁州島に海浜植生が根付き、羽根を休めるウミドリが種を落とすと、オシロイバナ科の高木が単純林を形成することもある。そこに人間がたどり着き、さまざまな動植物を運び込み、地形を改変して天水田でサトイモ科根茎類を栽培する。建造された祭祀場が方角を与え、意味に満ちた場所を生み、低平で単調な空間を構造化する。こうした環礁の景観史を、自然の営力と絡み合いながら住処を作り出す「ニッチ構築」の営みと捉え直してみることで、景観の物質性に着目する歴史生態学と意味世界を扱う解釈考古学の、これまで別々に議論されてきた成果の節合可能性が見えてくる。